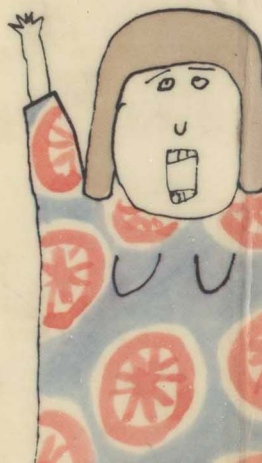
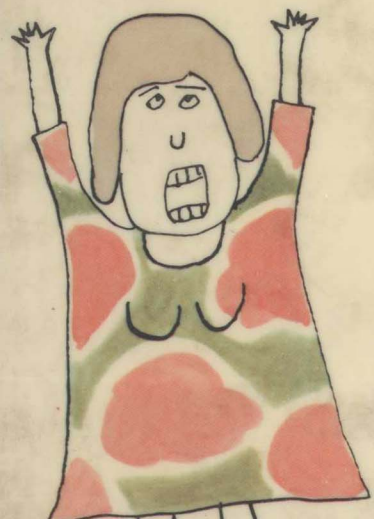


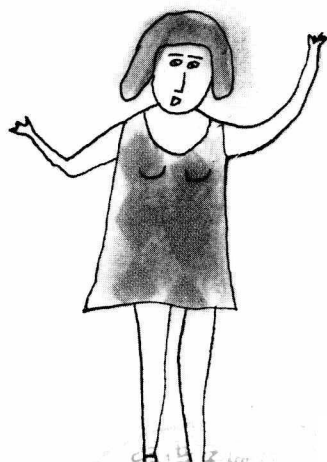
天気晴朗なれど

佐藤愛子



晴朗なれど

佐藤愛子



読売新聞社

天気晴朗なれど

昭和四十六年五月十日 第一刷
昭和五十九年七月十日 第六刷

著者 佐藤愛子

編集人 佐野 寧

発行人 堀内 稔

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の二 一〇〇
大阪市北区野崎町八の十 一五三〇
北九州市小倉北区明和町一の二 一八〇二

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 ナショナル製本

定価 八〇〇円

©, Aiko Satō, 1971

著者紹介 さとう あいこ

大正十二年十一月五日大阪府住吉に生れる。
昭和十六年三月、兵庫県甲南高等女学校卒業。
昭和二十五年、同人雑誌「文芸首都」の同人
となり、同じく三十二年「半世界」の同人と
なる。
昭和四十四年度上半期「戦いすんで日が暮れ
て」で第六十一回直木賞を受賞。
父は作家佐藤紅緑氏、異母兄は詩人サトウハ
チロー氏。
「ソクラテスの妻」「二人の女」「加納大尉夫
人」「愛子」等作品多数。
現住所 東京都世田谷区太子堂五の二十四の
二十三

目次

あたたかい元日	7
造反の時	13
造反第一歩	25
ロメオと弘枝	31
夜ふけの訪問客	37
中年の恋	43
ああ、中年	49
ボーシボーシ	55
芽生えの季節	62
漫歩機と性慾	68
鈍感な象	74

邪魔者	80
墜落	87
宇宙人	93
怪人物	99
悪夢の時代	106
古漬けタクアン	112
鬼の大王	118
大王の涙	124
女性用立小便器	130
五十六歳の抵抗	136
したか、せぬか	142
色メガネの男	148
初夏の光	154
知ったこっちゃない時代	161

いぎ、行かん	167
二人のバイオニア	173
家出夫人	179
透明怪物	185
真実の愛	191
悲哀の季節	197
ニセ神父	203
熱血夫人	209
妻心	215
女の代表	221
年下の男	227
欺された女	233
撃滅体操	239
老人性恋の病	245

宇宙時代

なでしこ会

性の飢渴者

撃ちてしゃまん

赤い月

衰亡の前兆

晩秋の空

ああ日本の空明けて

恋の発熱

仲間との別れ

昼行燈の溜息

装丁
風間

完

312 306 300 294 288 282 276 270 263 257 251

天
気
晴
朗
な
れ
ど

あたたかい元日

——正月元日だというのに、いったいこれはどういうこと！

一九六×年一月元旦^{がんたん}、青木朝子が年頭に当って口にした最初の言葉はそれだった。

——いったい、ぜんたい、あなたたちは……

そこまでいって口をつぐんだ。考えてみればその言葉は昨日の朝も口にした。昨日というのは、つまり去年ということになる。去年も今年も、毎朝、同じ台詞^{せうご}をいって一日が始まる。

——大晦日^{みそか}だというのに、いったい、ぜんたい、あなたたちはいつまで寝^ねている気——

はや去年に当る昨日の朝も朝子はそう叫んだ。……この忙しいのに、何だと思ってるんです！……と。

いや、いっそうよく考えてみれば、昨日の朝ばかりでない、その前の日も前々の日も、年がら年じゅうその台詞を口にして朝子の一日は開始されて来たのである。

——ほんとに、なんてことなの！

朝子は舌打ちをした。この舌打ちも馴^なれている。なんとことなの！ と叫び、間髪入れずチョッ！ と舌が音を立てる。舌に舌打ちを命じなくても、舌はもう心得ていて、朝子の気づかぬうちにはや勢よい音を立てているのだ。

まるで春のようにやわらかな日射^{ひざ}しが、古びた縁側^{えんがわ}いっぱいになっている。この節は縁側のある家は贅^{ぜい}沢な建築ということになっているらしいが、この家の縁側は四十年前の縁側である。東京世田谷区の西の外れ^{はずれ}に近いこの住宅地は、戦火に見舞われなかったおかげで、敗戦後の何年かはまわりの町々の焼跡に建った粗末なバラック建の家々の中で、何となく人よりも余分に幸福を持ち合せているような、特権的な平和を誇っているように見えたものだった。しかし今となってはその昔ながらの日本家屋の落ちついたたたずまいは、時代に取り残された古色蒼然^{こしきそうぜん}たるあばらやの集合体となり、台風シーズンが来るたびに、居住者ばかりかまわりの人々をもハラハラさせる有さまとなつて来た。

「しかし、このあたりはお静かでよろしゅうございますなあ」

と訪^{たず}ねてくる人は皆いう。それ以外にこの住居については寝^ねまようがないのだ。この家は丁度二十年前に朝子の父が朝子夫婦のために買ってくれたものである。この家へ越

ことなのである。

して来た夏に長女の夏子が生れた。三歳のいたずら盛りであつた春生のほかに、また一人子供が増えるというので、その頃出版事業をやつていた朝子の父がこの古家を買つてくれたのだ。それまで朝子は、南太平洋の戦線から奇蹟的に生き伸びて生還して来た夫と、親子三人、父の家に居候していたのである。

この縁側の黒光りするまでに拭き込んだ木目には、二十年の女房の歴史がある。朝子はそう思った。腹立たしいにつけ悲しいにつけ、四ツん這いになつて拭きこんだ縁側だ。春生がブリキのオモチャをこすつた跡、小刀で傷つけた跡、夏子がクレヨンをこすりつけた跡、いろいろな傷が重なり合つて底光りする黒さの中に沈んでいる。朝子は二十年間、一日といえども雑巾がけを怠つたことがないのだ。

——あたしのような、丈夫で長モチする、こんな働き者の主婦っているかしら……

この頃は朝子は何かにつけてそう思うようになった。その後には必ず

——それなのにあの連中ときたら、いったい何をどう考へているんだか……

と憤懣がつづく。朝子の日常を低迷するこの想念が強まって来たのは、どうやら雄介が停年退職になった時からの

元日だというのに夫も息子も娘もまだ起きて来ない。元旦の朝日は高く上つて、日射しはもう昼近い。雄介は昨年

十二月に二十年勤めた大正信用金庫を停年退職して以来、思わしい職もないままに家にいる。いや、正確にいうならば思わしい職がないというわけではなく、雄介には働く気が少しもないのだ。雄介は大正信用金庫の足立区の方の支店の支店次長まで行つて停年になった。大学を出て間もなくから戦争に二度もかり出され、通算五年四ヶ月の歳月を戦場で過していたために、雄介の信用金庫での在職年月は他の停年者に較べて遥かに少いのである。従つて彼の退職金は朝子の胸算用よりも遥かに少額だった。

もし朝子に父から譲られた若干の株券がなかったなら、雄介はどうする気だろう、と朝子は思う。しかし朝子はそのことについて質問すると、雄介はふてぶてしく（と朝子は感じる）こう答えるだけなのである。

「もしも、という仮定の話はわしは好かんね」

雄介は停年と聞いて方々から持ち込まれてくる話に耳も傾けずにいった。

「わしはもう働くのは飽きた——」

雄介は最高学府を出て二等兵で応召し、五年四ヶ月目に

曹長で帰って来たという男である。その成績から見れば、二十年で次長になったのはまだいい方かもしれない、と朝子は思い直す日もある。朝子は雄介が第一目の召集が解除になって、北支の戦線から帰って来たときに、父方の伯母の強引な勧めで見合をし、慌ただしく結婚した相手だった。「とにかく何でもいいから撮まえなくっちゃ、今に日本には目ぼしい男はいなくなっちゃうよ」

と伯母に嚇かされて慌てて結婚した。伯母がいうほど目ぼしい男とは思わなかったが、それでも最高学府を出てうるさい係累はなく、故郷の四国には幾らかの山林も持っているという。

「それにど面相の方だって、なかなか捨て難い味があるし……」

と伯母はいった。連れ添う者に死に別れた後、生花師匠をして気ままな後家暮らしをして来た伯母の佐伯まきは、そういうヒネった表現をするのがうまい。捨て難い味というのは雄介の場合、何となくノンビリと面積の広い頬やどっしりと構えている丸い鼻のあたりに漂っている悠然たる風格のようなものをいっただけであらう。

だがその時より闊した歲月は、その「捨て難い味」を風化し、今や雄介の頬はその面積の広さ分だけたるみが増し、七十八キロの大男が五十六キロの瘦身瘦軀となって弱

氣を失い（もつともその方は昔からあまりなかったが）風格も失って飄々と夕風に吹かれる物干場の浴衣のような男になってしまった。初老の域に入って若者のように朝寝坊だというのはない。布団の中で目が覚めているくせに、夢ともうつともつかずモソモソしているのが好きなのだ。「ごめんください——」

玄関の格子がカラカラと開いて、朗々たる声が家中に響いた。

「おめでとうございます。友田です」

名乗られるまでもなく、その楽天的な大声は友田三無であることはわかっている。

「ほら、友田さんですよ、お父さん……」

朝子は襖越しに隣室に声をかけた。

「どうするんです、上つていただくの？」

朝子の声はオクターブ上った。友田三無は朝子の歓迎しない客である。友田三無のおかげで雄介は働く意欲を失ったのだと朝子は確信している。三無というその名は妻なし子なし金もなしという彼の人生の理想をもじって自らつけた雅号である。雅号といっても俳人というわけでもなく書家でも画家でもない。友田三無は発明家なのだ。いや発明家というよりは発明狂といった方がいい。この二十年間、丁度、雄介が信用金庫に勤務した歲月を、友田三無は発明

に明け暮れた。三無と雄介は生死を共にした戦友で、ニユーギニアの負けいくさで最後のカタバンの半カケラを、更に半分に割って食べ合つたとき、自分が小さい方のカケラを取つたというので、三無のためなら命も捨てるというのが雄介の口癖になつてゐるのである。

三無が来たと聞いて雄介は急いで丹前たんぜんの前をかき合せながら寢室から出て来た。

「いよう、三無か。まあ上れ」

と、若者のように（といつても現代の若者ではなく、旧制高校時代の若者）どなつた。そもそも朝子にはそれが面白くない。せめて元日ぐらい親子四人が揃つて屠蘇とそを祝いたいという妻のささやかな願いは平気で無視するが、友田三無が来たと聞くと飛び起きる。

三無は「いやあ、おめでとう」といいながら、朝子の案内も待たずにノコノコ上つて来た。

「奥さん、年始のご挨拶あいさつまでに……」

そういつて紙にくるんだものをさし出した。

「まあまあ、いつも、お珍らしいものばかり頂戴しまして……」

お珍らしいものばかりという朝子の言葉には皮肉がこめられてゐる。友田三無は全くロクなものを持つて来ない。

ベルトのバックルの中が空洞になつていて小銭を入れられるようになってゐる「ヘソクリベルト」とか、下腹についた脂肪を取る器具だとか、ドビン兼用の茶碗ちわんなど、朝子は使いもせずに戸棚とだなの奥にほうり込んである。

「これは奥さんよりも、夏子ちゃんに使つてもらおうと思つて持つて来たんですがね。痴漢ちかんよけカンザシといひますな」

三無はいつたん朝子に渡した紙包みを取りもどすと、中から一本の花カンザシを取り出した。

「夏子ちゃんも年頃だ、今年の正月あたりは日本髪を結うでしょう。そこでこのかんざしを挿さして、カルタ会に行つてもらう」

「カルタ会なんて、友田さん、金色夜叉こんぎよしゃの時代じゃありませんのよ」

「いや、失礼、カルタ会でなければ何ですか。ゴーゴー大会ですか」

「ゴーゴーに日本髪で行くでしょうか」

「いや、とにかく正月だから盛装してどこかへ行くでしょう。すると帰りは遅くなる。暗い夜道を帰つて来たときに、痴漢が襲撃する。そのときです、このカンザシにちよつと手をつねる。そう、軽く手をつねるだけでいいんです。するとどうです。忽ちたち鳴り出す警笛の響。明滅する

光。……痴漢は仰天して一目散……とまあ、こういうわけです」

「なるほど、こいつはいいー」

黙っている朝子に代って雄介がいった。

「カンザシがピカピカするわけだな。怪物の目玉が光っているように見える」

「そういうわけだ。まあ、見てくれ」

三無は実験してみせた。花カンザシの花弁の中央に仕掛けてある小さなランプが、思いがけない強い光を出した。

それと同時に花カンザシは高い音を立てた。

ピーボー

ピー

ピーボー

ピー

「何だかお豆腐屋さんみたいですね」

朝子はいった。

「しかしなかなか面白い音色だよ」と雄介。

「面白いんじゃない、痴漢よけにはなりませんわ」

バカバカしい、という言葉葉を呑み込んで朝子は台所に立った。ついでに二階に向って声をかけた。

「夏子、春生、起きていらっしゃい。今日を何だと思っているんです」

「今日は一月一日よ。それがどうかした？」

そういつて階段を下りて来た夏子のはき古したジーパンに茶色のV字襟のセーターを着て、ジーパンの裾を包むように兄の春生の靴下をはいている。

「まあ、夏子、何ですか、その格好は……」

「どうしたの？ おかしい？」

「どうしたもうこうしたありませんよ。あなた、いったい幾つになったの」

「正確には二十歳と四ヶ月」

「はたちならはたちの娘らしく、お正月は、お正月らしく……」

朝子は口をつぐんだ。娘は母親のいうことなど聞いていないのだ。台所に立って歯ブラシを咥えたまま、片手で年賀状をより分けているさまは、この娘に痴漢よけカンザシを持って来た友田三無の常識のなさが改めて思われるのである。そこへ春生が起きて来た。

「お母さん、おめでとう」

と、この方は少しは人並の挨拶をする。新しい紺の、びつたりと下腹にくっついたバンドなしのズボンをはいて、レンガ色に銀モールのついたルバシカのようなものを着ている。

「どうしたの、おかしなもの着てるわね」

「うん、頼んで作ってもらったの、沢くんのねえさんに……」

「暮にお母さんが買ってきたセーターがあるでしょう」

「あれ、せっかくだけど、バーゲンだからねえ……」

春生は女のように細いしなやかな髪の毛を肩近くまで垂らして、前髪をびたりと横に撫でつけている。雄介の出た大学へ一浪で入って今年だが、学校の紛争をよそにドラムばかり叩いて日を暮しているのだ。朝子は正月そうそうの、この息子のいでたちには、夏子の場合とちがった文句がある。娘が電気工夫のような格好で現れたかと思うと息子の方はトランプのジャックというところだ。髪の毛を巻毛にしているだけ、まだマシだと思わねばならないのかもしれない。

朝子が座敷へ酒を運んで行くと、三無は机の上いっぱいに図面を広げて、何やら雄介に説明をしている最中だった。

新型移動式一穴パチンコ台

と図面には書いてある。

「なるほど、なるほど」

と雄介は盛に背いている。

「こいつは面白い。こいつは愉快だ」

その雄介の興に乗った声は、朝子に暗い予感を与える。

雄介が「こいつは面白い」を連発しはじめるとどういう事態が展開されて行くか。朝子には既に幾つかの好もしくない経験がある。

「つまり今までのパチンコは十中九までが偶然をたのんでいる点で面白くないんだ。あまりにも単調なんだな。自分の能力を開発するという興味は全くない。そこで考えたのがこの一穴式なんだ」

朝子はものすごい目で三無を眺め、返す視線で雄介を睨みすえた。三無は穴が一つだけしかなくて、しかもその穴が移動する仕くみになっているパチンコ台を發明したのだ。つまり穴を移動させて上から落ちてくるパチンコ玉をすくい取るべく操作をするという点に面白さをみつけようというのである。

「うーん、こいつは面白い。こいつは愉快だ」

雄介はいった。

「で試作品は出来たのか」

「半分まで出来たんだがね。いろいろ厄介な問題があって手古摺っている」

「では是非見せてもらおうじゃないか」

「見にくるか」

「ああ、行こう、すぐ行こう……」

雄介と三無は朝子の表情にも気づかず元日の町へ出て行

ってしまった。

「どうせ、お帰りは遅いんでしょね」

いった言葉に返事も無い。はや雄介の頭は一穴バチンコ台でいっぱいなのだ。

朝子はかっとし玄関の格子戸を力まかせに閉めると、それを合図のように家中に響きわたるドラムの騒音。

築後推定四十年の古家の柱は揺れ壁は落ちんばかりだ。

「兄さんたら、叩き初めだつて……はりきつてるわね」

夏子が玄関から出て行きながらいった。例の電気工夫のスタイルでどこへ行くともいわない。

ああこれが青木家の正月なのか。伝統ある日本の元日の姿なのか。朝子は呆然と玄関に立っていた。

造反の時

朝子はひとり、陽の当たっているうら枯れの小庭に向いて雑煮を食べた。まったく、何という元日だろう。主は発明狂と共に一穴式バチンコ台に夢中になって屠蘇も祝わずに出て行き、娘もまた電気工夫のような格好で男ものの靴下をはいて行く先もいわずに出て行った。息子は息子で雑煮が出来たといくら呼んでも返事もせずにドラムを叩いている。全く何という元日、何という家庭、何という世の中だろう。

朝子は思い出した。少女時代の元日。清らかに町筋に朝日を浴びて整然と並んでいた家々の国旗。みどりの門松。改たまった顔つきで行き交う人々。すべてが正月らしく折目正しく、清らかでまじめだった。道を歩いている大さへも、正月らしくまじめだった。

一年の計は元旦にあり、という言葉があった。朝子は元日の日記にその言葉を記したものだ。今年は何を目標とするか。

一、親に心配をかけぬこと、

一、先生のいわれることをよく聞く、

一、兄妹仲よく喧嘩せぬこと、

まじめにそういうことを誓い、書いたものだ。冷水摩擦の励行。八幡さまの境内の掃除。年よりをいたわる……

元日の朝は一家が六時に起きて物干台に上って初日を拝み、それから東に向つて皇居を遥拝した。神棚には灯がともり、父はよく響くたのもしい拍手を打つて、国家の興隆と一家の健康を祈つたものだ。それから一家揃つて雑煮を祝う。時代は戦争に向つて落ち込んで行く暗澹とした時代だったが、しかしまさしくそれは正月そのものであり、年の初めにふさわしい清々しくもめでたい一日であつたのだ。

ところがどうだろう。この正月は。娘や息子は雑煮が嫌いだという。正月だというのでいい着物を着るなんて「ナセンスー」と娘は叫ぶ。娘が年頃になったときのために、戦後の苦しい簡生活の中でも売らずにとつておいた訪問着と帯は、簞笥の底にしまひ込まれたまま、虫干しのたびに娘の嘲笑を買っている。

頭の上でドラムが鳴り響いている。ときどき、ものの怪のような叫びが聞こえるが、それは息子が歌を歌っている声だ。朝子は家鳴震動するこの音響の中で胸底からジワジワと湧き上ってくる怒りを感じた。いや、正確にいうなら

ばそれはもはや怒りとは呼び難いものだったかもしれない。かつての朝子の怒りはこんなジワジワしたものでなかった。かつと燃え立ち、紅蓮の焰となつて天を焦がした後、鎮火した。空襲、食糧難、敗戦、インフレ、夫が戦地から持つて帰つて来たマラリヤ、失業……そうした現実の障害を朝子はその怒りの燃焼力によつて切りぬけて来たといつていい。朝子は春生を出産するときの難産の苦しみでさえ、紅蓮の焰となることによつて泣き声ひとつ上げずに産み落したのである。

「春生ッ、春生ッ、うるさいわねッ、やめなさいったらやめなさいー」

かつての朝子ならば、ドラムに負けぬ大声でこの大音響と戦つたであらう。しかし朝子は今、家鳴震動する中でどなることも忘れて雑煮を食べている。

諦めか、馴れか、妥協か？

朝子は自問した。すると、何やらもの寂しい秋の終りの風のような、うそ寒いものが胸を吹き過ぎ、ひろがりかけた怒りは侘びしく悲しく心細いものに変質して行つたのである。朝子は氣力の衰えをしみじみと思つた。紅蓮の焰になるには朝子は疲れ過ぎたのだろうか？ それとも朝子にはもはや老いの兆があらわれて来たとしてもいいのか？